

十二支考

兔に関する民俗と伝説

南方熊楠

青空文庫

第1図 野兔

第2図 熟兔

第3図 岩兔

この一篇を綴るに先だち断わり置くは単に兔と書いたのと熟兔なんきんと書いた物との区別である。すなわちここに兔と書くのは英語でヘヤー、独名ハーセ、ラテン名レプス、スペイン名リエブレ、仏名リエヴル等が出た、アラブ名アルネブ、トルコ名タウシヤン、梵名舎さ々迦さか、独人モレンドルフ説に北京辺ペキンで山兔、野兔また野猫児と呼ぶとあつた。吾輩幼時和歌山で小児を睡ねむらせる唄うたにかちかち山の兔は笹ささの葉を食う故耳が長いというたが、まんざら舎々迦ささかてふ梵語に拠よつて作つたのであるまい。兔を野猫児とはこれを啖肉獣たる野猫こぶん児分と見立てたのか。ただしノルウエーの兔は雪を潜くぐつて鼯はつかねずみ鼠ねずみを追い食う（一八七六年版サウシ『随得手録』三）と同例で北京辺の兔も鼠を捉るのか知れぬ。日本で

は専ら「うさぎ」また「のうさぎ」で通るが、古歌には露つゆぬすみ窃ぬすてふ名で詠よんだのもある由（『本草啓蒙』四七）。また本篇に熟兔と書くのは英語でラビット、仏語でラピン、独名カニンヘン、伊名コニグリオ、西名コネホ、これらはラテン語のクニクルスから出たので英国でも以前はコニーと呼んだ。日本では「かいとうさぎ」、また外国から来た故南瓜とうなすを南京ナンキンというごとく南京兔と称う。兔の一群はすこぶる多種でオーストラリアとマダガスカルを除き到る処産するが南米には少ない。日本普通の兔は学名レプス・ブラキウルス、北国高山に棲すんで冬白く化けるやつがレプス・ヴァリアピリス、支那北京辺の兔はレプス・トライ、それから琉球特産のペンタラガス・フルネツシは耳と後脚がレプス属の兔より短くて熟兔に近い。一八五三年版パーキンスの『亜比西尼住記』ライフ・イン・アピシニアにもかの地に兔とも熟兔とも判然せぬ種類が多いと筆し居る。熟兔はレプス等の諸兔と別に一属を立てすなわちその学名をオリクトラガス・クニクルスという。野生の熟兔は兔より小さく耳と後脚短く頭骨小さくて軽い。しかのみならず兎兎は毛生え眼開いて生まれ、生まると直ぐに自ら食を求めて親を煩わさず自活し土を浅く窶くぼめてその中に居るに、熟兎兎は裸で盲で生まれ当分親懸り、因つて親が地下に深く孔あなを掘り通してその裏うちで産育する、一八九八年版ハーチングの『熟兎篇』ゼ・ラビットに抛もると原と熟兎はスペイン辺に産しギリシアやイタリアやその



東方になかった。古ユダヤ人もこれを知らずしたがって『聖書』に見えず、英訳『聖書』に熟兔コニーとあるはヘブリウ語シャプハンを誤訳したのでシャプハン実は岩兔ヒラクスを指すとある。岩兔は外貌が熟兔に似て物の骨こっかく、骨こっかく、その他の構造全く兔類と別で象や河馬等の有蹄獸の一属だ。この物にも数種あつてアフリカとシリアに産す（第三図は南アフリカ産ヒラクス・カベンシス）。巖すさまの隙間に棲み番兵を置いて遊び歩き岩面を走り樹に上るは妙なり、その爪と見ゆるは実は蹄ひづめで甚だ犀さいの蹄に近い（ウッド『イラストレテッド・ナチュラル・ヒストリー』）。却説兔と熟兔は物の食べようを異にす、たとえば蕪菁かぶを喫くらうるに兔や鼠は皮を剥はいで地に残し身のみ食うる、熟兔は皮も身も食べて畢しまう。また地に生えた蕪菁を食うに鼠は根を食い廻りて中心を最後に食うに熟兔は根の一側から食い始めて他側に徹す（ハーチング、六頁）。ストラボンの説に昔マヨルカとミノルカ諸島の民熟兔過ふえすぎ殖ふえすぎて食物を喫くい尽くされローマに使を遣つかわし新地を給い移住せんと請うた事あり、その後熟兔を獵かり、獵かり、獵かりさんとてアフリカよりフェレット（鼬いたちの一種）を輸入すと、プリニウスはいわくバレアリク諸島に熟兔夥おほくなつて農穫全滅に瀕しその住民アウグسطس帝に兵隊を派してこれを禦ふせがんと乞えりと、わが邦にも狐狸を取り尽くして兔うさぎ、鷹たかを極め農民困くるしむ事しばしばあるが熟兔の蕃殖はまた格別なもので、古く地中海に瀕せる諸国に播ひろがり十九世紀の始めスコットラン



ドに甚だ稀まれだったが今は夥しく殖えイングランド、アイルランドまたしかり、オーストラリアとニュージールランドへは最初遊獵か利得のため熟兔を移すとたちまち殖えて他の諸獸を押し農作を荒らす事言語に絶し種々根絶の方法を講じ居るが今に目的を達せぬらしい。しかしおかげで予ごとき貧生は在英九年の間、かの地方から輸入の熟兔の缶詰を常食して極めて安値に生活したがその仇をビールで取られたから何にも残らなんだワハハハ。日本に熟兔を養う事数百年なるもかかる患害うれいを生ぜぬは土地氣候等が不適なはもちろん、生存競争上その蕃殖を妨ぐるに力ある動物が多い故と惟おもう。しかし熟兔はなくとも兎ばかりでも弱る地方多きは昔そばよりの事でその害を防ぐ妙案が大分書物に見える。例せば『中陵漫録』五にいわく「兎蕎麦そばの苗を好んで根本より鎌で刈ったごとく一畦うねずつ食い尽くす、その他草木の苗も同じく食い尽くす事あり、いかようにしても防ぎがたし、これを防ぐには山下の粘土を取り水にてよく泥に掻き立てその苗の上より水を灌そそぐがごとく漑そそぎ掛ければ泥ごとごとく茎葉の上に乾き附いてあえて食う事なし、苗の生長には障さわらず、およそ圃ほの周り二畦三畦通りもかくのごとくすれば来る事なし、圃の中まで入りて食う事を知らず、米沢の深山中で山農の行うところなり」と、これより振ふるった珍法は『甲子夜話』十一に出で平ひ戸らで兎が麦畑を害するを避けんとて小さき札に狐の業わざと兎が申すと書く、狐これを見て怒



りて兎を責むるを恐れ兎害を止めると農夫伝え行う、この札立つれば兎難必ずやむは不思議だとある。英国にも ハヤ・パス 兎徑ハヤ という村や野が数あり兎が群れてその辺を通つたからこの名を生じた。兎の通路は熟兎のよりも一層判然はつきりするという事だが、わが邦の兎道うじなどいふ地名もこのような起因かも知れぬ。それから支那で跳兎、一名蹶鼠げつそというはモレンドルフ説にジプス・アンタラツスでこれは兎と同じ齧齒獸だが縁辺やや遠く、『本草綱目』に〈蹶は頭目毛色皆兎に似て爪足鼠に似る、前足わずか寸ばかり、後足尺に近し、尾また長くその端毛あり、一跳とび数足、止まるとすなわち蹶つまずきたおつゝと出づ、英語でジャーボアといいて後脚至つて長く外貌習慣共にオーストラリアのカンガルーに似た物だ(第四図)。

『孔叢子こうそうし』にこの獸甘草かんぞうを食えば必ず蛩きようきよう々々として青色馬あおうまに似た獸と※※として騾らのごとき獸とに遺のこす、二獸、人來るを見れば必ず蹶を負うて走る、これは蹶を愛するでなくて甘草欲しさだ、蹶も二獸の可愛さに甘草を残すでなく足を仮るためじやとある、まずは日英同盟のような利害一遍の親切だ、『山海經せんがいきやう』に〈飛兎背上毛を以て飛び去る〉とあるも跳兎らしい。

第4図 跳兎



東洋でも西洋でも古来兔に關し随分間違つた事を信じた。まず『本草綱目』に『礼記』に兔を明※^{めいし}といったはその目瞬^{まばた}かずに瞭然たればなりとあるは事實だが兔に脾臟なしとあるは實際どうだか。また尻に九孔ありと珍しそうに書きあるが他の物の尻には何^{いく}つ孔あるのか、随分種々^{いろいろ}と物を調べた予も尻の孔の数まで行き届かなんだ。ただし陳蔵器^{ちんざうき}の説にへ兔の尻に孔あり、子口より出づ、故に妊婦これを忌む、独り唇欠くためにあらざるなり、ただ尻に孔あるばかりでは珍しゆうないがこれは兔の肛門^{ぼとり}の辺に数穴あるを指^さしたので予の近処の兎狩専門の人に聞くと兎は子を生むとたちまち自分の腹の毛を掻きむしりそれで子を被うと言つた。牛が毛玉を吐く例などを比較してこの一事から子を吐くと言ひ出たのだろ。しかして支那の妊婦は兎を食うて産む子は痔持ちになつたり毎度嘔吐^はいたりまた欠唇^{いぐち}に生まれ付くと信じたのだらう。『雅』に咀嚼するものは九竅^{きやう}にして胎生するに独り兎は雌雄とも八竅にして吐生すと見え、『博物志』にはへ兔月を望んで孕み、口中より子を吐く、故にこれを兎^とという、兎は吐なりと出づ。雌雄ともに八竅とは鳥類同様生殖と排穢の両機が一穴に兼備され居るちゆう事で兎の陰具は平生ちよつと外へ見えぬからいい出したらしい、王充^{おうじゆう}の『論衡^{ろんこう}』に兎の雌は雄の毫^けを舐^なめて孕むとある、『楚辞』に顧兎とあるは注に顧兎月の腹にあるを天下の兎が望み見て気を感じて孕むと見ゆ、

従つて仲秋月の明暗を見て兎生まるる多少を知るなど説き出した。わが邦でも昔は兎を八竅ききょうと見た物か、従来兎を鳥類と見做みなし、獸肉を忌む神にも供えまた家内で食うも忌まず、一疋二疋と数えず一羽二羽と呼んだ由、古ギリシアローマの学者またユダヤの学僧いずれも兎を両性を兼ねたものとしてしばしばこれを淫穢いんえ不浄の標識とした(ブラウン『俗ブセウド説ドキシヤ・エヒデミカ 弁 惑』三卷十七章)。ブラウンいわくこれは兎の雌雄ともに陰具そばの傍に排泄物を出す特別の腺せんその状こう丸がんごとときあり、また肛門の辺に前に述べた数孔あり、何がな珍説を出さんとする輩うしろこれを見て兎の雌に辜丸あり雄に牝戸ありとしたらしい。しかのみならず、兎の陰部うしろ後に向い小便を後へ放つてもこの誤説もとの原もとだつたらうと。一七七二年版コルネリウス・ド・バウの『ルシャール・シユ・フィロソフイク・シエル・レー・アメリカン 研 究』卷二、頁九七には兎にも熟兎にも雌の吉クリトリリス舌 非常に長く陽物に酷似せるもの少なからず、これより兎は半男ふた女なといひ出したと出づ。支那にも似た事ありて『南山經』や『列子』にへ類自ら牝牡を為なす、食う者妬なまず、類は『本草綱目』に靈しやこうねい狸この事とす。『嬉遊笑覽』九にいわく、「『談往』に馮相詮という少年の事をいって『異物志』にいわく靈狸シウエツト一体自ら陰陽を為す、故に能く人に媚ぶ皆天地不正の気云々」。これは靈狸の陰辺に靈狸香シウエツトを排泄する腺孔あるを見て牡の体に牝を兼ねると謬あやまつたので古来斑ヒエーナ狼が半男女だという説盛んに欧州やア

フリカに行われたのも同じ事由と知らる。またブラウンは兎が既に孕んだ上へまた交会して孕み得る特質あるをその姪獣の名を博した一理由と説いたが、この事は兎が殖えやすい訳としてアリストテレスやヘロドツスやプリニウスが夙く述べた。それから『綱目』に

へ『主物簿』いう孕環の兎は左腋に懐く毛に文采あり、百五十年に至りて、環腦に転ず、

能く形を隠すなり、王相の『雅述』にいわく兎は潦を以て鼈と為り鼈は旱を以て兎と為る、
熒惑明らかならざればすなわち雉兎を生むと奇い説を引き居る。『竹生島』の謡曲

に緑樹影沈んで魚樹に登る景色あり月海上に浮かんで兎も波を走るか面白の島の景

色やとあるは『南畝莠言』上に抛ると建長寺僧自休が竹生島に題せる詩の五、六の句

へ樹影沈んで魚樹に上り、清波月落ちて兎流れに奔るとあるを作り替えたのだ。予が見

たところ兎を海へ追い込んだり急流に投げ込んだりすると直ぐに死んだので右の句はただ

文飾語勢を主とした虚構と思つていたが、仏経に声聞を兎川を渡る時身全く水に泛ぶ

に比し、イラストレーテッド・ナチュラリスティック・ヒストリー

避けんとて流水や大湖に躍り入り長距離を泳いで遠方へ上陸し、また時として犬に追究さ

れて海に入り奔波を避けずして妙に難を免るるある由記せるを見て、件の謡や詩の句はま

るで無根でないを知つた。

上述のごとく兎は随分農作を荒らしその肉が食えるから、兎猟古くより諸国に行われた。『淵鑑類函』四三一に后羿巴山に獵し大きな驢うさぎうまほどなる兎を獲た、その夜夢に冠服王者のごとき人が、羿にいうたは我は扶君えんかくんとしてこの地の神じや、汝我を辱めた罰としてまさに手を逢蒙に仮らんとすと、翌日逢蒙羿を弑しいして位を奪うた。今に至ってもその辺の土人は兎を獵とらぬと見え、また後漢の劉昆弟子常に五百余人あり、春秋の饗射きやうせつごとに桑弧そうこ蒿矢こうしもて兎の首を射、県宰すなわち吏属を率いてこれを觀みたとあり、遼の国俗三月三日木を刻んで兎とし朋くみを分けて射た、因つてこの日を陶里樺とうりか（兎射）と称えたと出づ。これは兎害を厭勝ましなのため兎を射る真似をしたのだろ。天主僧ガーピヨンの一六八八至一六九八年間康熙帝の勅を奉じ西韃だつたん鞞だんを巡回した紀行（アストレイ）『新編紀行』ア・ニユウ・ゼネラル・コレクシヨン・オヴ・ウオエージス・エンド・トラウエルス

航記全集『巻四、頁六七六』に帝が露人と講和のため遣わした一行がカルカ辺で兎狩した事を記して歩卒三、四百人弓矢を帯びて三重に兎どもを取り巻き正使副使と若干の大官のみ囿中に馬を馳はせて兎を射、三時間足らずに百五十七足取った。兎雨と降る矢の下に逃げ道を見め歩卒の足下を潜くぐり出んとすれば歩卒これを踏み殺した蹴り戻す、あるいは矢を受けながら走りあるいは一足折られ三足で逃のがれ廻る、囿中また徒士立ちて大なる棒また犬また銃を用いて兎の逃げ出るを防いだとあつて、兎狩も大分面白い

物らしいが、熊楠はこんな人騒がせな殺生よりはやはり些さしながら四、五升飲む方がずつと安楽だ。文政元年より毎年二月と九月に長崎奉行兎狩に託して人数押えにんずおさを行うた由（『甲子夜話』六四）、いづれそれが済んだ後で一盃飲んだのでしよう。『類函』四三一にへ『張潘漢記』曰く梁冀兎苑を河南に起す、櫛を移し在所に生兎を調発す、その毛を刻んで以て識しるしと為す、人犯す者あれば罪死に至る、何のためにかくまで兎を愛養したのか判らぬ。英国でもゼームス二世の時諸獣の毛皮を着る事大流行じやつたが、下等民も御多聞に洩れもずといつて銭ちやんはなし兎の皮を用いたので、ロンドン界隈かいわいは夥しく兎畜養場が立つたという（サウシ『随得手録』一および二）。

『礼記』に兎を食うに尻を去ると見ゆるは前述異様の排泄孔などありて不潔甚だしからしい。兎肉の能毒について『本草綱目』に種々述べある。陶弘景は兎肉を羹とせば人を益す、しかし妊婦食べば子を欠唇ならしむと言うた。わが邦でも『調味故実』に兎は婦人懐妊ありてより誕生の百二十日の御祝い過ぐるまで忌むべしと見ゆ。スウエーデンの俗信ずらく、木に楔くさびを打ち込んで半ば裂けた中に楔を留めた処や兎の頭を見た妊婦は必ず欠唇の子を生むと、一体スウエーデン人はよほど妊婦の心得に注意したと見えて妊婦が鋸台の下を歩けば生まるる子の喉が鋸を挽くように鳴り続け、斑紋ある鳥卵を食べば子の膚糙あらかく

て羽を抜き去つた鶏の膚のごとし、豚を触れば子が豚様に呻き火事や創ある馬を見れば子に痣あり、人屍の臭いを嗅げば子の息臭く墓場を行くうち棺腐れ壞れて足を土に踏み入れば生まるる子癩癩持となるなど雑多の先兆を列ねある（一八七〇年版ロイド『瑞典・ライフ・イン・スエデン』小農生活』九〇頁）。しかし母が妊娠中どうしたら南方先生ほどの大酒家を生むかは分らぬと見えて書いていない。一六七六年版タヴェルニエーの『波ス紀行』には拝火教徒兎と栗鼠は人同様その雌が毎月経水を生ずると忌んで食わぬとある。果して事実なりや。『抱朴子』に兎血を丹と蜜に和し百日蒸して服するに梧子の大きさのもの二丸ずつ百日続け用ゆれば神女二人ありて来り侍し役使すべしとある、いかにも眉睡な話だが下女扠底の折から殊に人間に見られぬ神女が桂庵なしに奉公に押し掛け来るとはありがたいから一つ試して見な。欧州にもこれに劣らぬ豪い話があつてアルペルス・マグヌスの秘訣に人もし兎の四足と黒鳥の首を併せ佩ぶればたちまち向う見ず無双となつて死をだも懼れず、これを腕に付くれば思い次第の所へ往きて無難に還るを得、これに鼪の心臓を合せて犬に餌えばその犬すなわち極めて猛勢となつて殺されても人に順わずと見ゆるがそんなものを拵えて何の役に立つのかしら（コラン・ドー・ブランチー『妖怪事彙』第四版二八三頁）。米国の黒人は兎脳を生で食えば脳力を強くしましたそれを乾して摩れば

齒痛まずに生えると信ず（一八九三年版『オールド・ラビット・ゼ・ヴーズー』老 兎 巫 蠱 篇』二〇七頁）。陳蔵器

曰く兎の肉を久しく食えば人の血脈を絶ち元氣陽事を損じ人をして痿黄せしむと、果してしからば好色家は避くべき物だ。また痘瘡に可否の論が支那にある（『本草綱目』五一）。

予の幼時和歌山で兎の足を貯え置き痘瘡を爬くに用いた。これその底に毛布を着たように密毛叢そうせい生せいせる故で予の姉などは白粉おしろいを塗るに用いた。ペピイスの『日記』一六六

四年正月の条に兎の足を膝関節込みに切り取つて佩ぶれば疝痛せんつう起らずと聞き、笑い半分試して見ると果して効いたとある。鱒の頭も信心と云うが護符や呪術じゆじゆつは随分信ぜぬ人

にも効く、これは人々の不自覚サブリミナル・セルフ識しに自然感受してから身体の患部に応通するのだとマヤースの『ヒューマン・パースナリチー篇』に詳論がある、私なんかも生来の大酒だつ

たが近年ある人から妻が諫めて泣く時その涙を三滴布片に落しもらいそれを袂たもとに入れ置くと必ずどんな酒呑みもやまる物と承りましてその通り致し当分めつきりやみました。プリ

ニウスの『ヒストリア・ナチュラリス』八卷八一章に兎の毛で布を織り成さんと試みる者あつたが皮に生えた時ほど柔らかならずかつ毛が短いので織ると直ぐ切れてしもうたと見ゆ、むや

みに国産奨励など唱うる御役人は心得て置きなはれ。『塩尻』卷三十に「或る記に曰く永享七年十二月 天野民部少輔あまのみんぶのしょうふ 遠幹その領内秋葉山で兎を狩獲信州の林某に依りて徳川殿

に献ず、同八年正月三日徳川殿 謡 初にかの兎を羹としたまえり松平家歳首兎の御羹これより起る、林氏この時露の臺を献ぜしこれ露の臺の権輿と云々」とあるは可い思い付きだ、時節がら新年を初め官吏どもの遊宴には兎と露の臺ばかり用いさせたら大分の物入りが違うだろ。本邦では兎に因んだ遊戯はないようだが英国には兎および獵犬ちゅうのがあつて、若者一人兎となつてまず出立し道中諸処に何か落し置くを跡の数人獵犬となつてこれを追跡捕獲するので一同短毛褐を着速く走るに便にす、年中季節を問わず土曜の午後活潑な運動を好む輩の所為だが余り動きが酷くてこれに堪えぬ者が多いという（ハツリット『信念および民俗』一九〇五年版卷一、頁三〇五）。予はそんな事よりやはり寝転んで盃一がいろいろと読者は今のさき妻の涙で全然酒がやんだといつたじやないかと叱るだろ。それから『今昔物語』に大和国に殺生を樂しんだ者ありて生きながら兎の皮を剥いで野に放つとほどなく毒瘡その身を腐爛して死んだと載せて居る。故ロメーンスは人間殊に小兒や未開人また猴や猫に残忍な事をして悅樂する性ある由述べた。すなわち猫が鼠を捉えて直ちに啖わず、手鞣にして抛げたりまた虚眠して鼠その暇を伺い逃げ出すを片手で面白そうに掴んだりするがごとし。わが邦の今も小兒のみか大人まで蟹の両眼八足を抜いて二※のみで行かせたり蠅の背中に仙人掌の刺を突つ込み幟として

競争させたり、警察官が婦女を拘留して入りもせぬ事を根問ねどいたり、前和歌山県知事川村竹治が何の理由なく国会や県会議員に誓うた約束をたちまち渝ほぐして予の祖先来数百年奉祀し来つた官知社を潰しひとえに熊楠を憤おこらせて怡よろこぶなどの類で、いずれも仏眼もて観れば仏国のジル・ド・レッツが多数の小児を犯姦致死して他の至苦を以て自分の最樂と做なしたに異ならぬ。川村の事は只ただいま今グラスゴウ市の版元から頼まれて編み居るロンドン大学前総長フレデリク・ヴィクトル・ジキンス推奨の『南方熊楠自伝』にも書き入れ居るから外国までの恥曝さらしじや。とにかくかかる残忍性多き者が平氣でおらるるこの世界はまだまだ開明などとは決して呼ばれぬべきはずだ。さて一寸の虫にも五分の魂でマヤースの『ヒューマン・パーソナリチー』に犬にも幽霊ある事は予も十数年研究していささか得たところあるが不幸にも観る人の心を離れて幽霊という物ある証拠を一も得ない。しかしもし人に幽霊あらば畜生にも幽霊あるべしで、『淵鑑類函』四三一に司農卿揚邁ようまいが兎の幽霊に遇つた話を載せ、『法苑珠林』六九に王將軍殺生を好んでその女兎鳴の音のみ出して死んだとある。

『治部式』じぶしきに支那の古書から採つて諸多の祥瑞を挙げた中に赤兎上瑞、白兎中瑞とある、赤兎はどんな物か知らぬが、漢末にへ人中に呂布あり馬中に赤兎あり」と伝唱された名馬

の号から推すと、まずは赤馬様の毛色の兎が稀まれに出るを上瑞と尊んだのだろ、『類函』に
 へ『後魏書』、兎あり後宮に入る、門官檢問するに従つて入るを得るなし、太祖崔浩
 をしてその咎きゆうちよう 徴おしえを推せしむ、浩以為らくまきに隣国 嬪ひんしやう 嬙しやうを貢する者あるべし、明
 年姚興果して来り女を献ずすなわち白兎は色皙の別嬪が来る瑞兆しるしで、孝子の所へも来
 る由見え、またへ王者の恩耆老に加わりまた事に応ずる疾はやければすなわち見るあらわとあつて、
 赤兎はへ王者の徳盛んなればすなわち至るいと出づ。『古今注』にへ漢の建平元年山陽白
 兎を得、目赤くして朱のごとしとあれば、越後兎など雪中白くなるを指したのでなく尋
 常の兎の白子を瑞としたのだ。熟兎に白子多きは誰も知る通りだが明の崇禎の初め始めて
 支那へ舶来、その後日本へも渡つたらしい（『本草啓蒙』四七）。黒兎は以前瑞としな
 かつたが石勒せきりくの時始めて水徳の祥とした。プリニウスいわく越後兎冬白くなるは雪を食う
 からと信ぜらる。何ぼ何でも雪ばかりじゃあ命が続かぬが、劉向の『説苑』一に弦章齋
 景公に答えた辞中、尺しやく 蠖とりむし 黄を食えばその身黄あわきに蒼あわきを食えばその身蒼あわきとあれば、動
 物の色の因をその食物に帰したのは東西一轍と見える。ただし只今いわゆる保護色も古く
 東西の識者に知れたは、唐の段成式の『西陽雜俎』に顛つちぐも 当蠅つちぐもを捉えて巢に入りその
 蓋を閉じると蓋と地と一色で並ともに糸隙の尋ぬべきなしと自分の観察を筆し、またおよそ禽

獸は必ず物影を蔵匿して物類に同じくす、これを以て蛇色は地を逐い茅兔（茅の中に住む兔）は必ず赤く鷹の色は樹に随うと概論したはなかなか傑い。明治二十七年予この文を見出し『ネーチュル』へ訳載し大いに東洋人のために氣を吐いた。その時予は窮巷の馬小屋に住んでいたが確か河瀬真孝子が公使、内田康哉子が書記官でこれを聞いて同郷人中井芳楠氏を通じて公使館で馳走に招かれたのを他人の酒を飲むを好かぬとして断わつたが、河瀬内田二子の士を愛せるには今も深く感佩し居る。前に述べた川村竹治などはまるで較べ物にならぬ、その後プリニウスを読むと八卷三十五章に蛇が土と同色でその形を隠す事は一汎に知らる、九卷四八章に章魚居処に随つて色を変すとあつた。

『本草啓蒙』に「兔の性狡にして棲所の穴その道一ならず、獵人一道を燻れば他道に遁れ去る、故に『戦国策』に「狡兔三窟ありわずかにその死を免れ得るのみ」といふ。兔は後脚が長くてすこぶる速く走りその毛色が住所の土や草の色と至つて紛らわしき上に至つて黠く、細心して観察した人の説にその狡智狐に駕すという。例せば兔能く獵犬がその跡を尋ぬる法を知り極めて巧みに走つて蹟を晦ます。時として長距離を前み奔つて後同じ道筋を跡へ戻る事数百ヤードにしてたちまち横の方へ高跳して静かに匿れ居ると犬知らず前へ行つてしまふ。その時兔たちまち元の道へ跳ね戻り犬と反対の方へ逃れ去る。また自

分の足に最も適し、犬の足に極めて不利な地を択んで走る事妙なり（ウッド、同前）。されば米国の黒人は兎を食えばその通り狡黠敏捷になると信じ（オエン、二三〇頁）、アフリカのバンツ人の俗譚に兎動物中の最も奸智あるものたれば實際を知らざる者これを聞書する時スングラ（兎）を狐と誤訳した（一九〇六年ワーナー『英領中央亞非利加土人篇』二三二頁）。露国の話に兎熊児を噛い唾を吐き掛けたので母熊怒って追いかくるを兎旨く逃げて熊窠に陥るとあり、蒙古に満月の夜兎、羊と伴れて旅立つを狼襲うて羊を啖わんとす、その時兎偽つてわれは帝釈の使で狼千足の皮を取りに来たと呼ばわり狼怖れて逃げた物語あり、わが邦の「かちかち山」の話も兎の智計能く狸を滅ぼした事を述べ、『五雑俎』九に「狡兎は鷹来り撲つに遇えばすなわち仰ぎ臥し足を以てその爪を撃してこれを裂く、鷹すなわち死す云々、また鷹石に遇えばすなわち撲つあたわず、兎これを見てすなわち巖石の傍に依つて回転す、鷹これを如何ともするなし云々」、『イソップ物語』に鷺に子を啖われた熟兎樹を根抜きに顛覆し鷺の巢中の子供を殺した話見え、インドに兎己れを食わんとする獅子を欺き井に陥る話あり。またいわく月湖邊に群兎住み兎の王を葬王と号づく。象群多くの兎を踏み殺せしを憤り兎王象王に月諸象を悪めりと告ぐ。象月を見んと望みければすなわちこれを湖畔に伴れ行き水に映れる月

影を示す。象月に謝罪せんとて鼻を水に入るるに水掻き月影倍多たり、兎象に向い汝湖水を擾せし故月いよいよ曠ると言い象ますます惶れ赦を乞い群象を帥いてその地を去る、爾後兎群静かに湖畔に住んで永く象害を免ると（一八七二年版グベルナチス『動物譚』原』卷二章八）。かく狡智に富む故兎を神とした人民少なからず。すでに『古事記』に兎神を載せ、今も熊野で兎を巫伴と呼ぶは、狼を山の神というから狼の山の神に近侍し傳令する女巫と見立てたのだろ。『抱朴子』に「山中卯日 丈人」と称える者は兎なり。和漢ともにこれを神物として直ちに本名を呼ぶを忌むのだ。兎神が逢蒙をして后羿を殺さしめた話は既に上に述べた。南米のチピウヤン人信じたは大兎神諸獣を率いて水に浮び大洋底より採った砂粒一つもて大地を造り部下の諸獣を人間に化した。しかるに水王たる大虎神これを拒んだので二神争鬪今に至るも息まぬと（コラン・ド・ブランチ、二八四頁）。また北米住アルゴンキン人は兎神ミチャボを最高神とし東方に住むとも北方に棲むともいい、人死すればそこへ往くと信ず（『大英類典』十一版二卷）。仏教薬師十二神中兎神あり。『大集経』二十二に淨道窟の兎天下を遊行して声聞乗を以て一切兎身衆生を教化し離惡勧善せしむとあるは兎中の兎仏ともいうべきものありと説いたので、『宝星陀羅尼經』三に仏が首楞嚴三昧に入ると竜に事うるもの象に事う

るものの眼には竜象と見え兎神に事うるものは仏を兎形に見るとあるから、察するにその頃インドに兎を族靈トテムと奉尊する民俗があつたらしい、別項虎に関する伝説と民俗とに述べた通り、族靈とは一族とある物との間に切るに切れぬ縁ありと信ずるその物をその一族の族靈といふので、予は先年『人類学雑誌』上でわが邦諸神の使い物は多くその神を奉ずる一族の族靈たりし由を説いた。例せば確か兎は氣比宮か白山の神使だった、ローマのカイゼルが英国に討ち入つた時兎雄鷄鷲を食わぬ民あつたと記したが、その風近世まで残り兎を畜こうてこれを殺さんとする者その由を兎に告げると兎自殺したという。ビツデンハムでは九月二十二日ごとに白兎を緋の紐で飾り運んでアガサ尊者ヒムンの頌を歌い村民行列す。未婚の女これに遇わば皆左手の拇おやゆび指と食指を伸して兎に向い処女よ処女よ他かれをここに葬れと唱う。その意味十分に判らぬが昔兎を族靈として厚く葬つた遺風とだけは確かに知れる

(一九〇八年版ゴム『歴史科学としての民俗学』二八七頁)。西曆紀元六十二年駐英ローマ兵士がイケニ種の寡后ポアジケアを打ちその二女を強姦せしよりポアジケア兵を挙げた時、后ふとこまず懐より兎を出しその動作を見て必勝うらなと卜い定め臣下皆そのつもりで勇み立ちてたちまちローマ方七万人を塵おうさつ殺したがついに兵敗れて後は自ら毒を仰いで死んだ。これ古ブリストン人が兎を族靈として卜占に用いたのだとゴムは論じた。ただしかの後の当の

敵たるローマ人また兎をトに用い食用として殺さなんだ（ハツリツト、同前）。熊楠そのト法の詳しきを知り得ぬが、プリニウス十一卷七三章にブリレツム辺等の兎は二肝あり他所へ移せば一肝を失うとあるを見るといわゆる肝アンチノボマンシート法をローマ人専ら兎に施したらしい。アボットの『マセドニア民俗』（一〇六頁）にアルバニア人のある種族は今に兎を殺さずまた死んだ兎に触れぬと見ゆ。キリスト教国で復活節に卵を彩り贈るが常で、英国ヨーク州ではこれを小さき鳥巢に入れて戸外に匿し児童をして捜し出さしむるに、スワビアでは兎の卵とて卵とともに兎を匿し、ドイツの諸部ではこの日卵焼の兎形の菓子を作る。わが邦にも古く伏兎という菓子あり、兎に似せた物と聞くが実否は知らぬ。復活節をイースターというはアングロ・サクソン時代に女神エストルをこの節祭ったから起る。思うにこの神の使物が兎で英国（ならびにドイツ等？）有史前住民の春季大祭に兎を重く崇めた遺風だろうとコックスが説いた（『アン・イントロダクシヨン・ツーフォークロー民俗学入門』一〇二頁）。熊楠つっし謹んで攷かんがうるに、古エジプト人は日神ウンを兎頭人身とす、これ太陽あした晨に天に昇るを兎の蹶けつき起するに比したんじや（バツジ『ゼ・ブック・オブ・ゼ・エジプシアンズ埃及諸神譜』卷一）。兎を月気とのみ心得た東洋人には変な事だ。コックス説に古アリア人の神誌に、春季の太陽を紅また金色の卵と見立て、後のちキリスト教興るにおほびこれを復活の印相としたという。しからば古欧

州にもエジプト同前日を兎と見立てた所もあつて卵と見立てたのと合併して、只今復活イースター節イースターにいわゆる兎の卵を贈りまた卵焼の兎菓子を作る事となつたのであろう。けだし冬以来勢い微かすかなりし太陽が春季に至つてまた熾さかんなるを表示したので。老友マクマイケル言いしはドイツでは村人この日兎を捕え殺して公宴を張る所多しと。大抵族靈トテムたる動物を忌んで食わぬが通則だが、南洋島民中に鳥賊いかを族靈としてこれを食うを可よしとするのもある（『大英類典』第九版トテムの条）。ドイツ人がもと族靈たりし兎を殺し食うも同例で、タスマニア人が老親を絞殺して食いしごとく身内の肉を余所よその物に倣してしまうは惜しいという理由から出たのだろ。サウシの書（前出）に若いポルトガル人が群狼に襲われ樹上に登つて害を免がれ後日の記念にその樹を伐り倒し株ばかり残して謝意を標しるした。カーナーヴオン卿その株を睹み由來を聴いて、英人なら謝恩のためこの樹を保存すべきに葡人はこれを伐つた、所異かわれば品異しなるも甚だし、以後この人がどんな難に遇うを見ても我は救わじ、救うて御礼に殺されちや詰まらぬと評したとある。先祖来護りくれた族靈を殺し食うてその祭を済ますドイツ人の所行これに同じ。しかし日本人も決して高くドイツ人を笑い得ず、予が報国の微衷なかながもて永々紀州のこの田舎で非常の不便を忍び身命を賭して生物調査を為し、十四年一日のごとく私財を蕩とうじん尽して遣やつて居るに、上に述べた川村前知事ごとき渝ゆ

誓してまで侮辱を加える者がすこぶる少なからぬからというて置く。

民俗学者の説に諸国で穀を刈る時少々刈らずに残すはもと地を崇めしより起る。例せばドイツで穀母、大母、麦新婦、燕麦新婦、英国で收穫女王、收穫貴婦人など称し、刈り残した稈を獣形に作りもしくは獣の木像で飾る、これ穀精を標すのでその獣形種々あるが、欧州諸邦に兎に作るが多い、その理由はフレザーの大著『金極篇』に譲り、ここにはただこんな事があると述べるまでだ。グベルナチス説に月女神ルチナは兎を使い出産を守る。パウサニアスに月女神浪人都を立てんとする者に教え兎が逃げ込む林中に創立せしめた譚を載す。インドにもクリアン・チャンド王狩りすると兎一疋林に入りて虎と化けた、「兎ほど侮りや虎ほど強い」という吉瑞と判じてその地にアルモウー城を建てたという。英国で少女が毎月朔日最初に言うとして熟兎と高く呼べばその月中幸運を享く、烟突の下から呼び上ぐれば効験最も著しく好き贈品随つて来るとか（一九〇九年発行『随筆問答雜誌』十輯十一巻）。『古事記』に大國主その兄弟に苦しめられた兎を救い吉報を得る事あり、これらは兎を吉祥とした例だが兎を悪兆とする例も多い。それは前述通りこの獣半男女また淫乱故とも、至つて怯懦故とも（アボット、上出）、またこれを族霊として尊ぶ民に凶事を知らさんとて現わるる故（ゴム、上出）と

もいう。すべて一国民一種族の習俗や信念は人類初めて生じてより年代紀すべからざる永歳月を経種々無限の遭際を歴て重畳千万して成った物だから、この事の原因はこれ、かの事の起源はあれと一々判然と断言しがたく、言わば兎を半男女また淫獣また怯懦また族靈としたから、兎が悪兆に極められてしもうたと言うが一番至当らしい、さて予の考うるは右の諸因のほかに兎が黠智に富むのもまた悪獣と見られた一理由だろ。獵夫から毎度聞いたは獵に出懸ける途上兎を見ると追ひ懸けて夢中になる犬多く、追えば追うほど兎種々に走り躲れて犬ために身憊れ心乱れて少しも主命を用いず、故に狩獵の途上兎を見れば中途から還る事多しと、したがって熊野では獵夫兎を見るのみかはその名を聞くばかりでも中途から引き還す。アボットの書（上出）にマセドニア人兎に道を横ぎらるるを特に凶兆とし、旅人かかる時その歩立と騎馬とに論なく必ず引き還す。熟兎や蛇に逢うもまたしかり。スコットランドや米国でもまたしかり。ギリシアのレスボス島では熟兎を道で見れば凶、蛇を見れば吉とすと見ゆ。英国のブラウン（十七世紀の人）いわく当時六十以上の人兎道を横ぎるに逢うて困らざるは少なしと。ホームこれに追加すらく、妊婦と伴れて歩く者兎道を横切るに遭わばその婦の衣を切り裂きてこれを厭すべしと。フォーファー州の漁夫も、途を兎に横ぎらるれば漁に出でず（ハツリット、同前）。コーンウォールの鋤夫金

掘りに之く途中老婆または熟兔を見れば引き還す（タイロル『ブリミチヴ・カルチユール』原始人文篇』卷一、章四）。兎途を横ぎるを忌む事欧州のほかインド、ラブランド、アラビア、南アフリカにも行わる（コックス、一〇九頁）。ギリシアではかかる時その人立ち駐りて兎を見なんだ人が来て途を横ぎるを俟ちて初めて歩み出す（コラン・ド・ブランシー、前出）。スウェーデンでは五月節日に妖巫黒兔をして近隣の牛乳を搾り取らしむると信じ、牛を牛小舎に閉じ籠め硫黄で燻べてこれを禦ぐ。たとい野へ出すも小児を附け遣わさず主人自ら牛を伴れ行き夕に伴れ帰って仔細に検査し、もし創つきたる牛あらばこれを妖巫に傷つけられたりと做し、燧石二つで牛の上から火を打ち懸けてその害去ると信じ、また件の黒兔に鬼寄住し鳥銃も利かず銀もしくは鋼の弾丸を打ち懸けて始めてこれを打ち留め得と信ぜらると（ロイド、前出一五）。以前は熊野の獵師みな命の弾丸とて鉄丸に念仏を刻み付けて三つ持ち、大蛇等変化の物を打つ必死の場合にのみ用いた。伊勢の巨勢という地に四里四方刀斧入らざる深山あり、その近傍で炭焼く男いつの歳か十月十五日に山を去って里に帰らんとするに妻子を生む。因つて二里半歩み巨勢へ往き薬を求め還つて見れば小舎の近傍に板箕ほど大きな蹟ありて小舎に入り、入口に血滴りて妻子なし。必然変化の所為と悟り鉄砲を持ち鉄鍋の足を三つ欠き持ちて足蹟を追い山に入れば、極めて大なる白猴新産の

子を食いおわり片手で妻の髪を掴み軽々と携えて走り行く、後より戻せと呼ぶと顧みて妻を樹の枝に懸けて立ち留まりやがて片手で妻を取り上げその頭を咬む、その時遅くかの時速くその脇下に鍋の足を射込んで殺しおわつたが、全体絶大なかなか運ぶべくもあらねばその尾のみ切り取つて帰つた。白毛茸じようせい生僧ほつすの払子のごとく美麗言語に絶えたるを巨勢の医家に蔵すと観た者に聞いた人からまた聞きだ。すべて化生けしやうの物は脇を打つべく銃手必死の場合には鉄丸を射つべしというた。スウエーデンと日本と遠方ながら似たところが面白くて書き付けた。英国の一部には兎が村を通り走ればその村に凶事生ずとも火災ありともいう。明治四十一年四月ハロー市の大火の前に兎一疋市内を通り抜けた由(翌年六月五日の『随筆問答雑誌』四五八頁)。

最後に和田垣博士の『兎糞録』はまだ拝見せぬが兎糞には種々珍しい菌類を生じ予も大分集め図説を作りある。備後の人いわく兎糞を砂糖湯で服すると遺尿に神効ありと。また予の乾児こぶんに兎糞を乾かして硬くなつたのを数珠に造りトウフンと名づけて、田辺湾の名物で只今絶滅した彎珠の数珠に代えて順札等を給あさむき売つた者がある、何してでも儲くりや褒められる世の中には見揚げた心底じゃ。
 (大正四年一月、『太陽』二一ノ一)

(付) 兎と亀との話

『太陽』雑誌の新年号へ「兎に関する民俗と伝説」という長篇を書いたがここには『太陽』へ出さなんだ事ばかり書く。

第一に小学児童が熟知よくしつた亀と兎の競争の話について述べよう、これは『イソップ物語』に出たものだ。イソップはギリシアの人で耶蘇ヤソ紀元前五百六十年頃生きておつた名高い教訓家だが、今世に伝われる『イソップ物語』は決してそんな古いものでなくずっと後の人がイソップに托かこつけて書き集めたものという、しかし何に致せ西洋話本の親方としてその名声を争うものはない、「亀と兎の競争の話」はこの物語に出た諸話の中もつとも名高い物で根気よ能く辛抱して励めば非常の困難をも凌しのいで事業を成就し得る事を示したものだから気力ある若い人々が世間へ出る始めにこの話を額の立て物と戴いたき真ま向まっ向こうに保持して進撃すべしと西洋でいう。この話に種々の異態がある、しかし普通英国等で持て囃はやすのはこうである。いわく兎が亀に会うて自分の足疾はやきに誇り亀の歩遅きを嘲ると亀対こたえてしからば汝と競争するとして里程は五里賭かけは五ポンドと定めよう、さてそこに聞いている狐を審判役としようと言うと兎が承知した。因つて双方走り出したが兎はもとより捷疾だから亀が見

えぬほど遠く駈け抜けた、ところで少し疲れたらしい、因つて路傍の羊齒叢中に坐つてうとうとと眠る、己れの耳が長いから亀がゴトゴト通る音を聞くが最期たちまち跳ね起きてまた走り抜きやるつもりだった、しかるに余り侮り過ぎて眠り過ぎた間に亀は遅いものの一心不乱に歩み走つてとうとう目的点へ着いたので兎の眼が覚めた時はすでに敗けいた。

欧州外にもこれに似た話があるが件の話と異なり、辛抱の力で遅い奴が疾い奴に勝つたのでなくて専ら智力の働きの勝つたとしている。サー・アレキサンダー・ブルドンがフィジー島人から聴き取つた話に曰く、鶴と蟹とがどちらが捷いと相論じた、蟹が言うには何と鶴が言つても己が捷い、すなわち己が浜を伝うて向うに達する間に鶴に今相論じている場所から真直に飛んで向うへやつと達し得ると言つた、鶴しからば競争を試つて見ようと言ふと蟹が応じたので二人一斉に一、二、三と言ひ畢つて鶴が一目散に飛び出す、蟹は徐に穴に入つて己の眷属が到る処充滿しているから鶴はそれを己一人と惟うて騙される事と笑ひいる、鶴が飛んでいる中何処へ往つても蟹の穴があるのを見て、さては己より前に蟹がそこへ来て早穴を掘つて住んでいやがるかと不審してそこへ下りて耳を穴に当て聴いて見るとブツブツと蟹の沫吹く音がする、また飛び上がつて少し前へ往くとまた蟹の穴が見えるのでまた下りて聴くと沫の音する、早蟹がここまで来て穴を掘つておると思つて何度も何

度も飛んでは聴き聴いてはまた飛び上がり、余り疲れてついに海に落ちて鶴は死んでしまつた。また一つフィジー島で話すは鶴と蝶との競争で蝶が鶴に向い何とトンガ島まで飛んで見よ、かの島には汝の大好物の蝦えびが多いというに、鶴これに応じて海上を飛び行くその背へちよつと鶴が気付かぬように蝶が留まつて鶴の飛ぶに任す、さて鶴が些すこし休息しようとしたすと蝶はたちまちその背を離れ予の方が捷いと言いながら前へと飛んで行く、小癩こしゃくなりと鶴が飛び出して苦もなく蝶を追い過すと蝶また鶴の背に留まり、鶴が休もうとするともた蝶が嘲弄しながら飛び出す、このように蝶は鶴の背に留まり通して鶴は少しも休む事ならずついに勞つかれ死んでもうた。

マダガスカル島にもこんな話が若干ある、その一つにいわく、昔々野猪と蛙が平地から山の絶頂まで競争しようと思つた、さて野猪が豪えらい勢いで乗り出すと同時に蛙がその頸上に飛び付いて留まつた、蛙の身は至つて軽く野猪の頸の皮がすこぶる厚いから一向気が付かぬ、かくて一生懸命に走つて今一足で嶺に達するといふ刹那せつな蛙が野猪の頸からポイと躍とんで絶頂へ着いたので野猪我は蛙にして遣やられたと往生を唱うた、残念でならぬから今度はどちらが能く跳ぶか競べ見んと言ふと蛙容易たやすく承諾し打ち伴れて川辺に到り一、二、三といひ了おうと同時に野猪が跳び出すその時遅くかの時速くまた蛙めが野猪の頸に飛び付

いたのを一向知らず、努力して川の彼岸へ跳び下りる前に蛙がその頸から離れて地へ下りたので野猪眼を赤くし口から白い沫を吐いて降参した。

今一つマダガスカル島の話には野猪と守宮やもりと競争したという、ある日野猪が食を求めに出懸ける途上小川側で守宮に行き逢い、何と変な歩きぶりな奴だ、そんなに歩が遅くちやアとても腹一杯に物を捉え食う事はなるまい、お前ほど瘡やせて足遅と来ちや浮うかうか々すると何かに踏み殺されるであろう、よしか、一つ足を試して見よう、予がこの谷をまるで歩き過はごした時に汝はまだこの小川の底を這はい渡つてしまわぬ位だろうと言うと守宮そんな言われると一言も出ぬ、しかし日本の売淫などの通語にも女は面つらより床上手などと言つて守宮にはまた守宮だけの腕前足前もあればこそ野猪様の御厄介にならず活きて居られると言うものサ、何と及ばぬながら一つ競かけくらべ駈をを試して見ようでござらぬかと言うと、野猪心中取るにも足らぬ守宮奴めと蔑みながら、さようサ、だがここは泥が多い万一己の足で跳ね上げる泥塊つぶが汝の身に降り懸かつて見ネーナ、たちまち饅頭の上へ沢庵の重しを置いたように潰つぶれてしまいが気の毒だ、ちようどソレその上の方に乾いた広場があるからそこで試して見ようそして予が負けたら予と予の眷属残らず汝守宮殿の家来になりましたよと言うと、どう致しまして野猪様御一足でいらつしやっても恐ろしくてならぬものを御

眷属まで残らず家来にしようなどは夢存じ寄りません、だがほんの遊戯と思召して一つ御指南を仰ぎたいと守宮が答えて上の方の広場へ伴れ行き、サアあその樹幹にヴェロと言う茅かやが生えて居る、そいつを目的に競争と約束成りて野猪がサア駈け出そうと言うと守宮オツト待ちなさい足場を確しかと検して置こうと言うて野猪の鬣たてがみの直ぐ側そばに生えおつた高い薄すすぎに攀よじ登りサア駈けると言うと同時に野猪の鬣に躍び付いた、野猪一向御客様が己の頸に取り付いていると心付かず、むやみ無性に駈け行きてかの樹の幹に近づくとたちまち守宮は樹の幹に飛び付きそれ私の方が一足捷かつたと言われて野猪腹を立て一生懸命に駈け戻ると守宮素捷くその鬣に取り付きおり、今一足で出立点と言うときたちまち野猪の前へ躍び下りる、かくすること数多回一度も野猪の勝とならななので憤りと慥つかれで死んでしまつたとある。

上述の諸話と大分變つたのがセイロンに行わるる獅と亀の競争の話で、いわくある時小川の岸辺で亀と獅と逢う、亀獅むかに對い汝がこの川を跳び越えるよりも疾く予はこの川を游およぎ渡つて見すべしと言つた、獅奇怪な申し条かなと怪しんで日を定めて競争を約した、その間に亀その親族のある一亀を語らい当日川の此方こなたに居らしめ自分は川の彼方かなたに居り各々ラトマル花苔一つを口中に銜ふくむ事とした、さて約束の日になつて獅川辺に來り亀よ汝は用

意調とうかと問うと、用意十分と答えたので、獅サア始めようと川を跳び越えて見れば亀はすでに彼岸に居る、またこの岸へ跳び来つて見ればやはり亀が早渡はやり着いている、同じ花荵を一つ含んでいるから二足の別々の亀を獅が同じ一足の亀と見たんだ、獅焼糞やけくそになり何と貴様は足の捷い亀だ、しかし予ほどに精力が続くまいいっそどつちが疲れ果て動くことのならぬまで何度も何度も試して見ようじゃないかと言うと、亀は一向動かずに二足別々に兩岸に坐りおれば好よいだから異議なくサア試そうと答えたので、獅狂人のごとく彼岸へ飛んだり此岸しかんへ飛んだり何度も亀が先にいるのでついに飛び死じに死んでしまいました。

シャムの話には金翅こんじちよう鳥竜を堪たんのう能するほど多く食おうとすれどそんなに多く竜はない、因つて金翅鳥ある湖に到り、その中に亀多く居るを見てこれを食くい悉つくそうとした爾時そのとき亀高声さけに喚さけんでわれらをただ食うとは卑劣ひれつじゃ、まず汝と競かけくらべ駈かして亀が劣くつたら汝に食わりようという、金翅鳥しからば試そうと言って高く天に飛び上がった、亀はたちまちその眷属一切を囑集して百足と千足と万足と十万足と百万足と千万足とそれぞれ一列に並んで全地を覆うた、金翅鳥その翼力を竭つくし飛び進むとその下にある亀がわれの方が早くここにあると呼ばわる、いかに力を鼓して飛んでも亀が先に走り行くように見えて、とう

とうヒマラヤ山まで飛んで疲れ果て、亀よわれ汝が足捷の術に精進せるを了ると言つてラサル樹に留まつて休んだとある。

ドイツにこれに似た話があつて矮身の縫工が布一片を揮うて蠅七疋を打ち殺し自分ほどの勇士世間にあらじと自賛し天晴世に出で立身せんと帯に「七人を一打にす」と銘して出立した、道で巨人に逢うて大力に誇ると巨人何だそんな矮身かと嘲り石一つ採つて手で搾ると水が出るまで縮める、縫工臆せず懐中より乳腐を取り出し石と称し搾つて見せると汗が出た、巨人また石を拾うて天に向つて抛ると雲を凌いでまた還らぬ、縫工兼ねて餌食にと籃に入れ置いた生鳥を出し石と称して抛り上げると飛び上がつて降りて来ぬ、巨人さても矮身に似ぬ大力かなと驚き入り今一度力を試そうと大木を引き抜き二人で運んで見んと言うと、縫工すべて木の本の方より末の方が枝が多く張つて重いものだ、汝は前になつて軽い根本の方を担げ、われは後にあつて重い末の方を持って遣らうと給いて、巨人に根を肩にさせ自分は枝の岐に坐つてゐるのを巨人一向氣付かず一人して大木を担げ行いたので憊れてしまつた、それから巨人の家に行つて宿ると縫工夜間寢床に臥せず室隅に臥す、巨人知らず闇中鉄棒もて縫工を打ち殺さんとして空しく寢床を砕く、さて早殺しやつたと安心して翌朝見れば縫工恙なく生き居るので巨人怖れて逃げ去つた、国王これを聞い

て召し出し毎々つねづねこの国を荒らし廻る二鬼を平らげしめるに縫工こわごわ恐々往つて見ると二鬼樹下に眠り居る、縫工その樹に昇り上から石を落すと鬼ども起きて互いに相棒の奴の悪いたず戲らと早合点し相罵り同士討ちして死におわる、縫工還つて臣一人で二鬼を誅したと奏し国王これを重賞した、次に一角獣現じ国を荒らすこと夥おびただしく国王また縫工してこれを平らげしむ、縫工怖々こわごわに立ち合うと一角驀まつしぐら然に駈け来つて角を樹に突つ込んで脱けず、縫工幸いに樹の後に逃れいたが、一角さえ自在ならぬと至つて弱い獣故たちまち出でその角を折り一角獣を王の前へ牽ひき出した、次に類似の僂ぎようこう倅ひで野猪を平らげ恩賞に王女を妻に賜うたとある、前に述べた亀が諸獣を給いた話に似たのはわが邦にも『古事記』に因幡なほの素しろ兔うさぎが鰐わにを欺き海を渡つた話がある、この話の類譚や起原は正月十五日か二月一日の『日本及日本人』で説くつもりである。

(大正四年一月一日および四日、『牟婁新報』)

青空文庫情報

底本：「十二支考（上）」〔全2冊〕、岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年1月17日第1刷発行

1997（平成9）年10月6日第10刷発行

底本の親本：「南方熊楠全集第一巻」〔十二支考※「#ローマ数字1、1-13-21」〕、乾元社

1951（昭和26）年5月25日発行

初出：兎に関する民俗と伝説「太陽 二一ノ一」博文館

1915（大正4）年1月

（付）兎と亀との話「牟婁新報」

1915（大正4）年1月1日、4日

※◇内の引用漢文の訓読は、編集部によります。

入力：小林繁雄

校正：曾我部真弓

1999年7月5日作成

2016年5月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十二支考

兎に関する民俗と伝説

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 南方熊楠

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>